

染織技術の継承に係わる問題と無形文化遺産

国立民族学博物館教授

吉本 忍

1970年にインドネシアのティモール島と、その周辺の島々の絨織物（イカット）の製作現場で調査をおこなってから今日に至るまで、わたしは染織技術を基軸とした現地調査を世界各地でおこなってきました。とりわけアジア太平洋地域の染めの技術に係わることとしては、西アフリカから東アフリカ一帯にかけて普遍的に着用されているアフリカン・プリントの染色技術とプリント・デザインのルーツが、ジャワ更紗、あるいはバティック（batik）の名で知られるインドネシアのジャワ島を中心としておこなわれてきたロウケツ染め技術とその染色デザインであることや、ジャワ更紗のロウケツ染め技法が日本を始めとする世界の広範な地域に波及していることをあきらかにしてきました。また、織りの技術に係わることとしては、これまで世界的に曖昧なままに推移してきた、「織物」とはなにか、「織機」とはなにか、さらに「織る」とはいかなることかということについて明確に定義するとともに、織りの技術の延長線上には、産業革命のみならず、コンピュータの発明とその後につづくIT革命があり、織りの技術が人類史の中核技術であることについてあきらかにするなかで、アジア太平洋地域の織りの技術、織機、織物の諸相についても紹介してきました。

このような染めや織りの技術をはじめとした調査・研究の過程で、大きな問題として浮かび上がったことの1つとして、産業革命以降の機械化・大量生産システムの世界的な波及が、いたるところで人類の無形文化遺産である手仕事によるモノづくりを放棄しつづけるという事態を引き起こしているということがあります。

今やわれわれは、人類がこれまでに経験したことのないきわめて便利な時代のなかで生きています。しかし、その一方でわれわれは、いたるところで環境破壊を引き起こし、手仕事によるモノづくりの多くも放棄しつづけています。具体的には、木を削ったことがない、薪を割ったことがない、火を熾したことがないといった人や、包丁もまな板も使わないで日々の生活をいとんでいる人も急速に増えています。たしかに現代社会は、便利この上ない時代ではありますが、自然災害は今なお世界中のいたるところで頻発しています。自らがモノづくりをすることなしに、機械化によって大量生産されたモノが容易に手に入る生活があたりまえになってしまったわれわれが、手仕事によるモノづくりを放棄しつづけていることは、人類がモノづくりをすることで日常的に培ってきた創意工夫をする能力を低下させ、自然災害でライフラインが途絶するというような非常時での生き延びる術をも放棄しつづけていることにほかなりません。そうした人類史上未曾有のきわめて危機的な状況に立ち至っているといえる時代のなかで、われわれは今こそ手仕事への回帰を真摯に実行に移すべきだと考えています。

一方、すぐれたモノづくりを保護しようとする努力は、いたるところで始まっています。わが国には1950年に施行された文化財保護法があり、国際的には2003年にユネスコ総会で採択された「無形文化遺産の保護に関する条約」があります。しかし、長年にわたって世界各地で見てきたモノづくりのうちには、誤ったモノづくりを伝統の技術として継承している例が少なからずあります。その背景には、いたるところで手仕事によるモノづくりを放棄しつづけているという危機的な状況があることはあきらかですが、法律や条約で保護されているモノづくりのうちにも、同様の例があることは由々しきことであり、文化財、あるいは無形文化遺産を正しく保護するためには、学術的な調査研究の進展とその成果の活用を図ることが急務となっています。